

第3回子ども・青少年を健やかに育むための 文化・芸術振興に係る検討会 会議録

日 時	令和2年3月25日（水）15時30分から17時まで
場 所	御所西京都平安ホテル 羽衣の間
委 員	新川達郎会長、伊豆田千加委員、上田静男委員、栗山圭子委員、 小崎恭弘委員、竹内香織委員
次 第	◇ 議題 「子ども・青少年を健やかに育むための文化・芸術振興について（報告書）（案）」について

(1) 説明

事務局から「子ども・青少年を健やかに育むための文化・芸術振興について（報告書）（案）」用いて説明。

(2) 意見交換

主な意見等

- 地域間交流は非常に重要。報告書のまとめの部分に、京都市・京都府それぞれのエリアを越えた相互交流を通して互いに文化・芸術の価値を認識することで、新たなものが創造できるというような趣旨の内容を盛り込んでほしい。
- 産業との融合などによる新たな価値の創造の部分に、文化・芸術に関わることの価値を子ども・青少年に伝えるような文言を追加してほしい。
次に、暮らしの文化や観光振興、コンテンツビジネスの振興の推進について言及されている部分には、お花やお祭りの儀式などの昔から続く伝統的な文化については言及しなくても良いのか。
さらに、ワーク・ライフ・バランスの実現をはじめとした社会環境の整備について言及している部分で、「失敗」という表現が使われているが、違う言葉が良いのではないか。子どもたちそれぞれが持つ多様な個性や視点を受け入れるような表現にしてはどうか。
- 子どもの文化・芸術と教育との関わりという点においては、社会教育も含めた地域全体での教育ということも、十分に活用していくことが重要ではないか。
また、報告書案の随所に自然文化・伝統文化・歴史文化の3つの文言が入っているが、これらをもう少し軸として押し出すことで、より京都らしさが表れるのかもしれない。

- 今回の報告やこれから先の施策・事業は、子ども・青少年が主体であるということを根底に置いた上で広がってほしい。

ハードの整備運営よりもソフト事業に重点を置いた政策展開が必要ということについては大賛成。既存のハードの整備運営は、子どもも含めた市民参加型で行い、またこれらの既存の施設をどのようにより子どもに開かれた施設にしていくかという視点でソフト事業を立ち上げてもらいたい。

次に、文化・芸術によるイノベーションについて、京都府、京都市ともにこれまで以上に豊かなイメージを持ってほしい。文化・芸術に関わるプロセスに市民が関わり、アート力でまちづくりを行っていくことがイノベーションにつながるのではないか。今の文化からもっと大きな視点でのイノベーションが起こるということを疑わずに、事業を展開してほしい。

さらに、芸術家と鑑賞者との橋渡し役を果たすディレクター、キュレーター、コーディネーター、エデュケーターの方々が仕事として文化や芸術の現場に関わりを持ち、発信できる土壌があれば良いと思う。京都でもこういった職種の人たちが増え芸術家が増えることにより、文化や芸術の現場に関わっていく機会も増えていけば良いし、現場での実践の中からこういった人たちのコンピテーション(行動特性)を拾い上げて評価し、発信していくことが重要だと考える。

- デジタルネイティブである現代の子ども・青少年には、これまでにない新たな創造が期待できる反面、子ども・青少年を健やかに育むという視点からは、デジタルとの付き合い方についての注意喚起が必要ではないか。

- 報告書全体を見たときに、文化・芸術に関する基本的な倫理観のようなものは示さなくて良いのかと感じた。

- まとめの部分でもいいので、京都市内と京都府内など地域間交流を促進するような文言を盛り込んでどうか。

- 報告書全体を見たときに、子どもたちに馴染みのある文化・芸術関連の要素としては、とりわけ京都府内では五穀豊穰のお祭りが個性化されており、子どもたちに当たり前に引き継がれているので、先ほどあった地域間交流について言及する部分にこの要素を追加すると、子どもたちと彼らを育てる大人のどちらにも寄り添った文言になると思う。

- 今回の報告書は、未来の京都の文化・芸術を支える子ども・青少年に、その意欲を湧かせ、持たせられるようにしたいという趣旨のものと理解している。子ども・青少年という言葉が主体としている以上、青少年育成団体等に対しても、今後目指すべき方向性を分かりやすい言葉で示してもらえればと思う。

- 文化・芸術について、特に子どもに関わることについては明るいものであってほしい。
今の社会情勢を見ると、子どもたちの息苦しさを感じるが、それだけに文化・芸術の位置づけや意味が際立っているように思う。このようなことを踏まえて、今の子どもたちへのメッセージをどこかに盛り込めば、すごく楽しいものになるのではないか。
- 前回の検討会のまとめでの会長の、「子どもたち自身が文化の担い手であり、芸術家であるという前提で、伝える側、伝えられる側がお互いに認め合い、楽しみを作りながら、文化・芸術振興を通じた更なるはぐくみ、さらには自然や歴史などが持っている多様性や包摂性といったことも考えていく必要がある」という言葉を盛り込むだけで、ハートフルさが出ると思う。
今回の報告を受けて、京都府と京都市でばらばらに事業が展開されるということではなく、この今だからこそ、京都から本当に文化で横串が通った子ども・青少年のための動きが、うねりができたのだと言えるようなものになるように、府と市がばらばらではなく一体となって動いていくというところはぜひお願いしたい。

会長まとめ

地域間交流の推進については、子どもたちが様々な地域の文化歴史や、そこで育まれた生活様式、その中で生まれてきた様々な芸能に触れることを通じて、自分自身の育ってきた文化を考えるとともに違った文化に触れ、その中で新しい大きな楽しみを見出していくような機会や可能性を広げていくような書き方がされるといいと思う。

全体として、一つ目には、子ども・青少年を主体に据えて、文化・芸術振興を通じてどのように子ども・青少年が豊かで明るく楽しい人生を送れるような未来を創るかということが最終的な目標だと思う。それと同時に、そのために大人がすべきこと、子どもたちに学んでほしいことについても言及する必要がある。その点では、京都府や京都市はもちろん、地域や企業などにも頑張ってもらいたいことになるのではないか。

その中で、具体的には、京都という場所には南北問わず、厚い歴史や伝統の中で培われてきた芸術・文化の積み重ねが数多く残されており、そしてそれが今日までそれぞれの地域に根付いていることの素晴らしさというのをそれぞれ若い人たちにも改めて感じてもらうことで、京都の子どもたちのための文化・芸術振興というのが、さらに大きく進んでいくのではないかということが大きく強調されたように思う。

二つ目には、子どもたちの成長や育ちを文化・芸術の分野の中で考えていくと、どのような時期に、どのような経験や感じ方ができると良いのかということ工夫していかなければならないし、それをうまく結合して引き出していくことができるような、そういう文化・芸術の学びの機会や触れる機会の創出について考えていかなければならないという議論があった。

三つ目には、子どもたちが文化・芸術に関わる際、それぞれが自分の個性を發揮しながら、お互いに認め合うことができるような楽しみ方や、そこから生まれてくる新たな文化・芸術の可能性についてもっと考えても良いのではないかという議論があった。

四つ目には、三つ目とも関連するが、とりわけデジタル社会の中では、子どもたちが文化・芸術に触れるにあたって必要な、ある種の倫理観や想像力を生み出す枠組みがさらに強く求められていくのではないかという議論があった。

以上の四点にあるような子どもたちの育ちについて議論の中心に置きつつ、一方でそのための環境づくりをどのように進めるのかという点においては、ハードよりソフトをという流れがある中で、どのように従来のハードの文化というのをイノベーションしながらソフトを生み出すのかという議論があった。イノベーションは、単に何かが変わるということだけではなく、新しいものが生まれていくということ自体をみんなで一緒に創っていくということが必要になるのではないかと思っている。

また、行政はもちろん、子どもたちの学びに関わっているそれぞれの関係機関がさらに力をつけていく必要があるし、より実践的にこうした問題に関わっていくことが必要になってきているという御指摘があった。そこでは、キュレーション（情報を選んで集めて整理すること）やエデュケーションの問題もありつつ、伝統的なコーディネーターやあるいはプロデューサーというような能力も当然必要になってくるという議論があった。

さらに、これからの子どもたちの文化・芸術というのを考えていくときに重要な要素となる、産業やビジネスの分野については、従来あるものをどのようにイノベーションし、伝統文化をどのように新しいビジネスモデルにしていくかという点も面白いテーマだと思う。子どもたちが、歴史的にも空間的にも多様な文化・芸術活動を感じ、実践できるような環境をつくったときに、子どもたちの感性や未来の生き方ができ上がるということが期待できるようになるといいと感じた。